

なごや学生社会課題解決プログラム 各チーム活動報告への講評

名古屋市立大学の鶴飼教授より、各チームの活動プロセスや成果に対する講評をいただきました。
ぜひ、皆さんの今後の様々な活動のヒントにしてください！



■ 鶴飼 宏成 (うかい ひろなり) ■

名古屋市立大学 学長補佐 (スタートアップ・イノベーション担当)、大学院経済学研究科 教授
専門はアントレプレナーシップ教育の研究と実践、起業家論、ベンチャービジネス論。大学における教育実践として、Youth Enterpriseプログラムに参加する学生チームのアイデア創造・企業連携・商品開発・販売実践をサポート。



【なごやの魅力をお届け隊！】の皆さんへ

10代・20代の目から、かけ算の思想と実行が不可欠であることが主張されています。かけ算の思想とは、評者の目線から言えば、発表にあった「デザインが大事×SNSアカウントの統合」、「カードタイプ/リッチメッセージ×ユニバーサルデザイン」、「最初の5秒×ショートムービー×届ける手段」、「学生プロジェクト×複数部署横断型インターンシップ」などの「×」です。

新しいことは「結合」で生じやすく、それを皆さんは素直に言葉にできていることが素晴らしいですね。

その一方、「広報」も大事だけど、「広聴」ももっと大事ではないかな。これはどこかの部署が行うのでは無く、すべての市職員が備える意識と姿勢かもしれませんね。

皆さんの経験がどうやったらより多くの行政職員を目指す若者に届くか、考えてみてください。期待しています。

【ふくろう】の皆さんへ

3つの視点(仮説)「①子育てがしやすい街 ②学生がまちづくりに関われる ③多文化交流が盛ん」を通じたなごやのまちづくりの調査と分析は、大変興味深いですね。すべての仮説において「調査(聞く、知る)」と「分析(裏側を見る、体系的に考える)」がしっかりと行われていて、その中から「人とのつながり」の大切さの確認とさらなる必要性を宣言できている点が評価されるでしょう。

その一方、実行するのは誰だろう？あるいは実行するために支援する人は誰だろう？という疑問が残りました。「新しい公共(つながり)」の必然性、市民協働という考えと方法論が、市の運営にビルトインされていることの重要性をもっと主張してもよかったのではないのでしょうか。継続的な活動を期待します。

【にじいろマーカース】の皆さんへ

「地域活動の担い手不足」は、どの地域でもいつの時代でも共通する問題です。しかし、具体的に見れば、いつそしてどの地域から〇〇という個性が見え、平均像では語れません。今回の課題は、まさにこのパラドックスにあります。

しかし、どの領域に着目するか、そして、いかなる類型化に当てはめるのか、は行動を促すためにも欠かせない検討の入り口です。その意味で、「①情報収集のハードルを下げる。②地域の関係を築くハードルを下げる。③地域活動へ参加するハードルを下げる。」はパラドックスを見えやすくできています。

その一方、いかに若者の参加を現実のものとするのが鍵ですね。今回の発表からは、若者の成長を支える物語は弱かったと思う。ストーリーテリングが不可欠なのではないかな。その部分がもっと出ていると共感を呼ぶのでは？継続的な活動を期待します。

【laughter】の皆さんへ

骨髄バンク登録者増に向けた事業コンセプト「コネクト。命のバトンをつなげたい。」は主張が明確でわかりやすいものですね。若年者層の登録者割合が2割である事実認識を出発点に、自らアクションを起こし、厳しい現実を知ったからこそ、従来と異なる方法での対策(Twitter投稿との連動も効果なし。物理的なアイキャッチとしての「ガチャガチャ」は効果あり。オリジナルイメージキャラクター「ポーンじい」+LINEスタンプ+キーホルダーの啓発グッズ)の検討に至ったプロセスは、確実に皆さんの困難を乗り越える原体験になったことと思います。

その一方、これが政策効果を高めるという視点で言えば、先人の知恵に学んでもよかったかもしれませんね。私は「骨髄バンク登録者・幹細胞提供者の行動経済学的特性」(大竹文雄他著、『行動経済学』13巻(2020年)所収)をみつけました。

皆さんが検証して効果のあった即物的な効果を高める方法以外の可能性も検討できるかもしれません。継続的な活動を期待します。

ー参加学生が、これからの名古屋市職員像を宣言！ー

自分ごととして実際の問題を捉え、課題設定し、対策を考案する。この一連のプロセスで最も重要なことは、自分ごととする皆さんの意志です。その意志は、情報を集めること、問題を発見すること、問題を解決することにつながります。今回参加の皆さんは、活動を通じて真に自分ごととして物事を考える意志が強くなったのではないのでしょうか。だからこそ、上手くいかない事実を発見し、それが制度や慣行によって先人が諦め未解決の状態になっていることに対しても、素直に声にできたのでしょ。

皆さんに残された課題は、その意志で、結果が出るまで対策案を見直しながら、実行する経験です。

しかしこれは、先の話ですね。

今、皆さんは、準備万端でスタートラインに立ったと考えてよいと思いますよ。

鶴飼教授より
全体を通して

